



### 大友時代を 生きた人々



鹿毛 敏夫

鎌倉時代後期以降の日本では、荘園や公領の内部に、惣村は惣村という自治的な村が生まれます。惣村は寄合という村民の会議に従って「おとな(乙名)」などと呼ばれる村の指導者によって運営されました。現代の「おとな(大人)」は一人前に成長した人を意味しますが、この時代には組織・集団のリーダーを表す言葉でした。

「町々のおとな共」の存在を記した「筑紫陣注進状」(前田育徳会蔵経閣文庫)

### 町々のおとな共

大名は、館の周辺に町をつくり、そこに商工業者も集住して都市が各地に発達していきます。戦国大名の都市としては、北条氏の小田原、今川氏の府中(静岡市)、上杉氏の春日山(新潟県上越市)、大内氏の山口、大友氏の豊後府内(大分市)などが有名です。

この時代には、港町や門前町、宿場町も繁栄します。惣村と同様、それらの都市では、富裕な商工業者たちが自治組織をつくらせて市政を運営。日明貿易の根拠地として栄えた堺や博多は、それぞれ36人の会合衆、12人の年行司と呼ばれる豪商の合議によって市政運営されました。

古代からの政治都市京都でも、町衆と呼ばれた富裕商工業者たちが、都市民の自治組織「町」を組織します。町では独自の町法を定めて住民の生活や営業活動を守り、また、町が集まって町組という組織をつくり、町衆の中から選ばれた月行事が町や町組を運営しました。京都の祇園祭は、この町を母体とした町衆たちの祭りです。

近年の研究では、15、16世紀の日明貿易・南蛮貿易で栄えた豊後府内も、その構成単位となつた40余りの町に、商工業者たちによる自治組織が存在していたことが分かってきました。その史料は、東京の前田育徳会蔵経閣文庫の中にある「筑紫陣注進状」。豊臣秀吉の九州出兵の際、天正14(1586)年11月3日に秀吉軍の一員として豊後を訪れた四国讃岐国の大名仙石秀久が、増田長盛と木下半介に宛てた書状です。秀久は、都市府内の繁栄の様子を「府内の町家数五千ばかり御座候」と記し、「町々のおとな共」がいると報じています。

16世紀後半に5千軒の町家が軒を連ねる日本屈指の都市に成長した府内の町々は、「おとな(乙名)」と呼ばれた富裕商工業者や豪商のリーダーシップの下で自治運営されていた事実が分かります。かつて盛大に催されていた府内祇園会も、豪商仲屋宗越をはじめとする「おとな共」を中心に、町衆たちが催行していたものでしょう。

(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

11月1回掲載

### 屈指の都市・府内のリーダー